

# 「生と死の教育」に関する開発実践 ～小学校における道德授業とミニ道德を中心に～

教職実践開発専攻 河内 菜摘

## 1 主題設定の理由と研究方法

### (1) 「いのちの教育」の台頭と課題

子どもたちを取り巻く状況が刻一刻と変化している現代社会において、青少年によるいのちに関わる問題が日々起きている。少年犯罪や自殺、いじめの問題等も後を絶たなくなっており、子どもたちのいのちを脅かすものにまでなっていると言える。「生」や「死」が実感として子どもたちから遠ざかっている今、自他のいのちについて考え、その重みを理解し尊重するために、いのちについて学ぶことは非常に重要なことである。

しかし、現在行われている道德教育における「いのちの教育」は、実際の子どもたちの道德的实践と十分に結びついていないという指摘が文部科学省や岐阜県教育委員会においても提示されている。学校現場の中で「生」だけでなく「死」をも扱う教育活動は意外に数少ない。国語科や社会科、理科等の中では「生」や「死」について学ぶことはあっても、それはあくまで国語的、社会的、理科的な視点での「生」や「死」の捉えであり、そこには命を根本的に考え、自らの生き方につなげるという活動が存在することは少ない。ところが、子どもたちの生活を見てみるとどうだろうか。ゲームやインターネット、漫画等、子どもたちの周りには「生」に関する情報も「死」に関する情報も、分け隔てなく常に流れている。上蘭恒太郎も、子どもたちは少なからず「死」に興味をもち知ろうとするが、それらの対話が人間同士の間で直接されることは極めて少ないと論じている<sup>(1)</sup>。それゆえ、学校教育において、「生」だけでなく「死」についても子どもたちが理解をしていくことが、「いのちの教育」を実施するにあたって必要である。本稿ではこうした観点から「生と死の教育」を検討することにした。

### (2) 「生と死の教育」に関する先行研究の検討

「生と死の教育」に関する先行研究を見ていきたい。まず、橋本治は「自殺総合対策大綱」の策定・改定を受け、児童生徒に対する自殺予防を目的とした教育の実施にあたり、岐阜県、愛知県、静岡県の実職の教員（幼稚園・保育園、小学校、中学校、高等学校）で有効回答数981名のアンケートを行っている<sup>(2)</sup>。アンケートの内容は、①自殺予防教育の必要性②自殺予防教育の可能性についてである。ここから、自殺予防教育の必要性と可能性の両方において、小学校に対しての肯定値が低いことが分かり、自殺予防教育を小学校段階において行うことが難しいことを示唆している。ここから自殺予防という面においては「生と死の教育」を実施し、子どもたちの生命観を育てることが緊急の課題となっているということが言える。アンケート調査の結果、小学校段階において子どもたちの自殺予防教育についての可能性は低いという事実が判明した。しかし、中学校段階や高校段階において本格的に自殺予防教育を実施するのであれば、小学校段階で自殺予防教育の基礎となる「生と死の教育」を行っていくことが、中学校段階以降の自殺予防教育を成立させていくのではないだろうか。中学校以降における自殺予防教育だけではなく、小学校において「生と死の教育」を実践していくことにより、より効果的な子どもたちの死生観を育てることも、視野に入れるべきである。また、橋本は自殺予防教育と題して小学校以降における「生と死の教育」の必要性を説いているが、そこでは自殺予防教育という治療的な側面だけではなく、学校教育において、予防的・開発的な「生と死の教育」も

行う必要があると言える。自殺予防の視点を含めた、「生と死の教育」を実施することで、学校教育において普段から子どもたちの死生観を育成することも必要であると言える。

次に、金光は生命尊重の道德教育において、長期的プログラムの必要性を述べている<sup>(3)</sup>。現在行われている道德授業においては、1時間の目標というものが非常に重視され、1時間のねらいさえ達成できればよいとされている道德授業が横行していることを指摘している。1時間のねらいだけではなく、それらを包括的に見た長期的なねらいも、道德教育における生命尊重において、このダブルスタンダードを設定することの重要性を述べている。さらに、金光はどの教師にも可能な生命尊重の道德教育を行う重要性を説いている。道德教育における生命尊重の分野については、小学校段階からの長期的プログラムにおいて「生と死の教育」を、どの教師にも可能な形で実施することが必要であることが分かる。

また、川口由は、「死」を扱ういのち教育に着目をし、教師の継続的实践に関する研究を行っている<sup>(4)</sup>。治療的な教育ではなく、予防的な教育の重要性を唱えるとともに、学校教育という場で教育を行うことは、公共性の高い内容に限定がされるということを指摘している。学校教育の現状に沿う形で公共性の高い話題を取り上げるということは、「死」についての教育もその公共性に含まれるということである。さらに川口は、「死の教育」とはその教師の経験に基づいて指導がされるものであり、一般性に欠ける内容ではないかということについても指摘をしている。研究の中で、社会科を基盤とし、その中で「死の教育」を試みる教師の授業について分析をしている。第五福竜丸について個人的に想いの強い教師が実践を行ったため、この教師にしかできない実践となるのではないかと、「死の教育」の普遍性については疑問をもった。しかし、それは社会科を基盤にし、個人的な「死」の観念を前提に授業を実施したことに課題があると言える。先に述べたように、学校教育は公共性の高い内容を扱うものとされている。第五福竜丸に対する個人的な想いを「死の教育」としたこの教師は、「死の教育」と社会科の授業を同時に実施しようとした。結果、それは教師個人に依存する授業となり、公共性に欠けるものとなった。「死の教育」は、教科のついでにやるものではない。もちろん、他教科や他領域と関連させることも可能ではあるが、それを「死の教育」とするのではなく、まずは「生と死の教育」だけに着目した内容を取り扱うことで、教師個人に依存しない、子どもたちの死生観を育成する教育が必要だということが言える。

さらに、中井文子は、アメリカにおけるデス・エデュケーションについて研究を行っている<sup>(5)</sup>。アメリカではデス・エデュケーションは「生と死の教育」という形で、既に多くの実践がなされている。そこでは、「死」の歴史、さまざまな文化における「死」、葬儀の意味、悲観、末期患者と「死」、自殺の予防といった様々な「死」にまつわる内容が教えられている。また、初等教育においては、墓碑名や新聞の死亡記事から「死」について考えさせるという内容が教えられている。また、「死」に関するつづりの授業や、体験的授業として、音楽の授業で「生」と「死」についての音楽を聴いて話し合わせたり、事故による「死」や手術による「死」のロールプレイングが実施されたり、地元の葬儀業者をゲストティーチャーとして講演会をしたりしている。アメリカにおいては、1970年代当時、青少年の自殺増加が問題となっていた。また、1969年から臓器移植が可能になり、新しい「死」の定義を学ぶ教育の必要性が出てきていた。子どもと「死」に関する社会歴史的背景、子どもの「死」の概念、子どもと自殺、子どもと死別、子どもと悲嘆、子どものカウンセリングといった内容は当時から現在においてもほぼ同様の内容が教えられており、「生と死の教育」を行うことの重要性が示唆されてきた。アメリカにおいては、このような実践がなされている。「死」についての知識を学ぶことは、日本の学校教育の中ではなかなか見ることができない。客観的な「死」と主観的な「死」を学ぶことのできる授業形態は、日本におけるデス・エデュケーションにおいても取り入れていくべきである。

### (3) 本研究の目的と方法

以上の先行研究を踏まえ、本稿では学校教育の中で、特に道德教育において「生と死の教育」を行っていくことの重要性和その効果を検証することを目的とする。学校の教育活動全体の中で「生と死の教育」を実施することで、子どもの生活全般に影響を与えることができるように試みる。具体的には、道德の時間にお

ける道徳授業と、それを包括する他教科や生活指導における道徳教育において、「生と死の教育」を実践する中で、「生と死の教育」の社会的有用性を見出すとともに、その方法についても検討をしていく。

その中で第一に、上記した道徳教育における課題点を改善していくために、道徳の時間における授業構想の創意工夫、そしてそこで扱う教材の選択・開発等に取り組む。第二に、実践の中では「生」のみだけではなく、「死」にも焦点を当てることで、子どもたちにはどのような影響があるか、子どもたちの死生観にどのような変化が表れるか検証する。第三に、学校教育の中で「死」をどのように取り扱うべきなのかということについても検証する。第四に、子どもたちの道徳的実践力に結び付く死生観の育成についても、どのような方法が効果的であるかを確かめ、それが子どもたちの生活の中で実際に表出してくるのかということについても検証をする。そして、どの教師にも可能な形で実施できるような「生と死の教育」について、研究を進めるものとする。本研究の方法としては、道徳の時間における授業、生活指導実践、アンケートによる子どもたちの意識調査、そしてミニ道徳を行っていくものとする。

## 2 「生と死の教育」に関する背景と開発実践

### (1) 子どもたちを取り巻く状況

冒頭においても触れたように、時代が変化する中で、子どもたちの環境も大きく変化し、子どもたちによる非行の問題も目立つようになった。子どもたちによる非行は未だになくなることはなく、荒れる子どもたちとして、社会にうまく適合できない子どもたちが数多く存在する。学校でうまくいかない経験を蓄積した子どもたちは、それを本来とは異なる方向に発散させようとする。少年犯罪・少年非行には、そのような子どもたちの背景が存在し、家庭の教育方針の時代の変遷による変化もそれに大きく影響し、自制心の効かない、いわゆるキレル子どもとしても有名である。

近年では、少年犯罪の報道も頻繁に見られるようになり、1997年に神戸で起きた酒鬼薔薇連続児童殺傷事件をはじめとして、1998年の栃木女性教師刺殺事件、1999年に起きた堺市通り魔事件、2004年に起きた佐世保小6 女児同級生殺害事件等、人々に多大な影響を与えたことは記憶にも新しい。様々な少年犯罪が起きる中、子どもたちの死生観を今一度、見直していかなければならない時代が来ている。

しかし、上記したような荒れた子どもたちだけが犯罪や非行を起こすわけではない。ごく一般的で、何も問題がないと思われる子どもたちですら、犯罪や非行を犯す可能性をもっているのだ。実際に、「あの子はこんなことをやる子ではない」という報道の中の台詞は、非常に多く流れており、ごく普通の子どもにも、犯罪や非行を犯すことを考慮しなければならない。

同様に、いじめと自殺の問題もあとを絶たない。いじめと自殺は必ずしも因果関係があるわけではないが、両者は非常に関わりの深いものとして認知されている。いじめは学校でも大きな問題として取り扱われる一方で、教員には目に見えない形態で行われることも増えてきた。パソコンや携帯電話、スマートフォンを子どもたちが所有しインターネットを利用する中で、情報モラルをうまく扱うことができず、トラブルになったりいじめが起きたりするケースも珍しくない。このようなケースに対しても、治療的に指導を行うことは効果がないとまでは言えないが、きりがいいことになるだろう。情報の扱い方以前に、子どもたちの心情を育成することが必要なのである。

自殺に関しても、我が国の実態は深刻であり、年間3万人を超す自殺者を減少させるには、大多数を占める中高年だけではなく、青少年への自殺を抑制させる教育も必要だろう。ストレス耐性が弱くなっていることも、簡単に自殺をしてしまう原因の1つではあるが、いのちへの軽視が、自殺をする側にもさせる側にも関わっているのではないだろうか。ウェルテル効果のように、テレビの報道が自殺の連鎖を引き起こすことも、そもそもは人々の死生観が育ちきっていないことが要因の1つとして挙げられる。

また、昨今では科学技術が発達し、同時に医療技術も飛躍的な進歩をしている。そのことが、いのちを曖昧化させているとは言えないだろうか。現代の子どもたちにとって「死」が遠ざかったのは、決してテレビやゲーム、インターネットのせいで「死」が遠い世界の話になってしまったからだけではない。現代社会に



においては、多くの人々の「死」は病院で起きる。人の死に目に遭うことは、子どもたちにとっては珍しい出来事になっている。また、延命治療ができるようになったことも子どもたちから「死」を遠ざけている要因である。さらに、近年話題になっているのが人間の「死」はどこからどこまでであるのかという問題である。脳死についての問題がそうであるように、人間のいのちはいつ始まっていつ終わるのかという問いに対しては様々な答えが存在する。受精をした時からという人もいれば、母体から生まれてきたときだという人もいる。同様に、人はいつ死ぬのかと問われれば、心臓が止まったときだという人もいれば、脳の活動が停止したときだという人もいる。

以上の例から見ても分かるように、いのちと一言に言っても、その捉え方は現代社会において様々であり、曖昧である。人々の寿命を伸ばす医療技術の発達であるが、このようなところでのいのちへの曖昧さを生み出していることも事実である。また、それらが子どもたちの生命観を曖昧なものにしていることも、忘れてはならない背景である。

## (2) 道徳教育の在り方への指摘

子どもたちへの道徳教育の在り方に注目が集まっている。今までの道徳教育は、「生」に焦点化をすることで、生命尊重の教育を行ってきたことについては上記したように、学校教育における道徳教育で「生」だけにスポットを当てることで子どもたちの生命観を深めていくことにはもはや限界がきていると言える。文部科学省や岐阜県教育委員会においてもその指摘がされているが、ここでは文部科学省の『生徒指導提要』<sup>(6)</sup>から、道徳教育のこれからの在り方を検討する。

『生徒指導提要』では、子どもたちのいのちに対する感受性の弱まりがあることや、実感を伴う教育をしていく必要があること、「生」と「死」の両方について触れる意味を考えること、自殺予防的のいのちの教育を行う必要があること、そして予防的・開発的観点から、小学校段階におけるいのちの教育の必要があることを説いている。

教育行政における道徳教育の目指す方向性と課題を踏まえ、現行の道徳教育における生命尊重の課題点を、以下のようにまとめた。第一に、形式化された授業形態である。第二に、道徳実践力との結びつきの薄さである。第三に、教材選定や教材開発の弱さである。第四に、授業時数の確保の難しさである。第五に、「生」に偏重した「いのちの教育」である。以下に示す筆者の実践においては、以上の5点において改善をするものとする。

## (3) いのちのアンケートの実施と分析

児童の実態調査として長良西小学校2年生122名を対象とし、6月に実施した第1回いのちのアンケートについて、道徳授業やミニ道徳を実施する予定の4組と、その比較対象としての1～3組との分析を行う。まず、項目①(図1)については、児童にとって大切なものが何かということについて問うた。全体的に4組の方がほとんどの選択肢に対して高い数値を示している。自分、家族、友だち、先生という項目がいずれも高い値を示していることから、児童は人間関係の面において大切だと感じている。また、学校、健康という選択肢についても半数以上の児童が大切だと感じていることが分かる。習い事やお金については1～3組と4組に対して差が開いている。おもちゃの選択肢については、非常に低い値となっている。いのちという選択肢に対しては1～3組の児童の96.6%、4組の児童の96.8%が大切だと感じている。ここから、ほとんどの児童がいのちは大切だと感じていることが分かる。

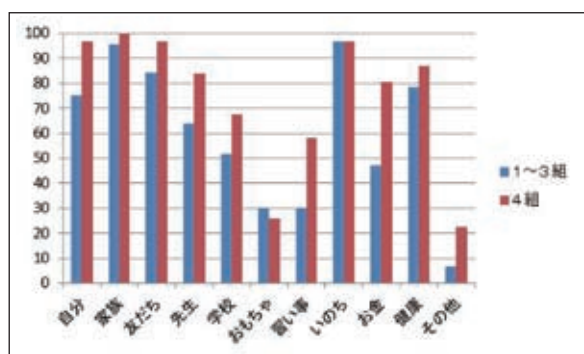


図1 第1回アンケート項目①

次に、項目②である、学校で飼育している生き物を

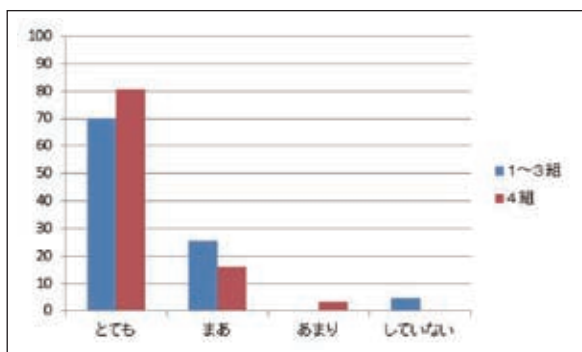


図2 第1回アンケート項目②

大切にしているかということについて問うた(図2)。1〜3組と4組を比較すると、とても大切だと回答している児童が4組の方がやや多いことが分かる。しかし、あまり大切にしていない・大切にしていると回答する児童は3〜5%と、学年全体を通して生き物を大切にしていると児童が自身で捉えていることが分かる。

しかし、児童の実態を見てみると、4組の児童については教室の後ろでザリガニが死んだままになっていたり、学級で飼育している魚が死んだまま放置されて

いたり、とても学校で飼育している生き物を大切にしているとは言い難い。このことから、学級での実態があるにも関わらず、児童はアンケート結果のように自らの死生観を肯定的に捉えていることが分かる。

さらに、項目③については、児童に学校で飼育している生き物が死んでしまった際、どのように思うかという質問をした。結果、どちらの児童も、かわいそう、悲しいという回答が多くあり、生き物の「死」に対して、共感するような感情があることが明らかになった。

また、項目④については、自然は素晴らしいかという質問をした。金華山へのハイキングや、金環日食での経験を記述する児童がいる一方、学校で飼育したり自分が飼っていたりする生き物が生まれたという経験を書いた児童もいた。数値としては両者とも80%近くの児童が自然を素晴らしいと回答している。

次に、項目⑤については、いのちの素晴らしさを感じたことがあるかという質問をした。1〜3組の児童のうち、はいと回答したのは60.2%であるのに対し、4組の児童は83.9%と、差があることが分かる。

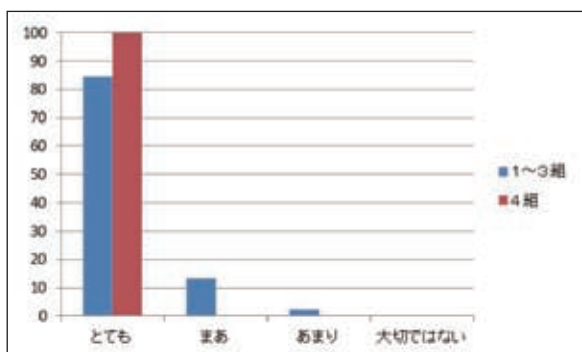


図3 第1回アンケート項目⑥

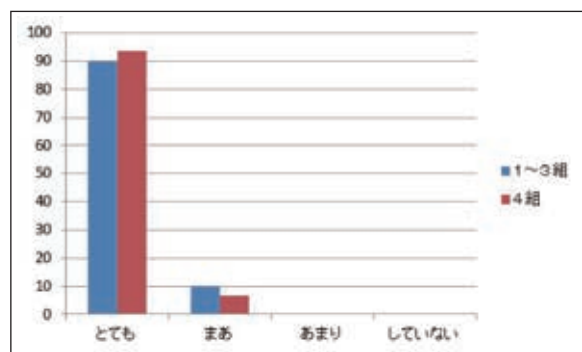


図4 第1回アンケート項目⑦

項目⑥では、いのちは大切だと思うかという質問である(図3)。ほぼ全員の児童がとても大切だと回答をしている。1〜3組については、まあ大切だと回答している児童が13.5%、あまり大切ではないと回答して児童が2.2%いた。

このことから、多くの児童がいのちを大切だと感じている一方で、ごく少数ではあるが、いのちをあまり大切ではないと感じている児童がいることが分かった。

最後に項目⑦では、項目⑥のいのちは大切なものだと思うか、という質問を受けて、いのちを大切にしているかという行動についての質問をした(図4)。とても大切にしていると回答している児童は依然として大多数を占めるが、1〜3組の児童がとても大切にしていると回答した児童が項目⑥と比較して多いのに対し、4組については減少していることが分かる。

#### (4) 道徳授業の実践と考察

前述したように、道徳教育の課題の中では、①形式化された授業形態、②道徳的实践力との結びつきの薄



図5 道徳授業「ふしぎな音」での様子



図6 自らのいのちと関わらせて考える児童

さ、③教材選定・教材開発の弱さ、④授業時数の確保、⑤「生」のみに焦点化した教育活動を挙げた。この中で、道徳授業においては①、③、⑤について取り扱うものとする。

長良西小学校3年生を対象とした「ヒキガエルとロバ」の道徳授業実践においては、現在岐阜県で行われている道徳授業の標準的な形で実施をした。資料を配布し、発問をするという形式で授業をすすめると、児童の発言は資料に拠るものが多く、なかなか自己と結びつけることができなかつた。最終的な価値に到達するまでには多くの時間を要し、子どもたちとはなかなかつながらなかつた。

次に、長良西小学校3年生、長良小学校6年生において実施した、絵本『100万回生きたねこ』を用いた道徳授業について述べる。この授業では、どちらの学年の児童に対しても資料は配布せず、物語を読みながらスライドショーで授業を展開した。子どもたちは自分とかわらせて考えを述べることができ、絵本のような児童の興味を引く教材は、児童にとって価値に迫りやすいことが結果として得られた。

長良西小学校2年生で行った「ふしぎな音」では、筆者が道徳の副読本から選択をして実施した。資料の中で、主人公が自らの心音を聞くことでのちがあるという実感をする場面においては、実際に聴診器を用意し、子どもたちに自らの心音を聞

かせた。すると、「生きてるって感じた。」と子どもたちからは感想が得られ、その後の授業展開も白熱したものとなった。

最後に、同じく長良西小学校2年生において、「わすれられないあの日」という授業を行った、この資料は、筆者の自作資料であり、東日本大震災を扱っている。いのちの尊さを学ぶ上で、ここではデス・エデュケーションを用いる。そのような内容の資料は、副読本の中からは見つけることができなかつた。新しい社会事象を道徳授業で扱うためには、自作資料を作成する必要がある。授業を展開していく中で、人の死に直面する主人公の姿に涙をこらえて意見する子どもは、自らの生き方とつなげていのちについて考え、死生観を深めた。

以上の道徳授業の実践からは、子どもが学校生活と道徳授業の関連性を見出したこと、道徳的体験を取り入れた授業展開方法、資料の選択や開発を児童の実態に合わせて積極的に行うこと、実感のもてる授業展開をすることが、「生と死の教育」において非常に効果があるということが明らかになった。

### (5) ミニ道徳の実践

次に、道徳教育での課題である②道徳的实践力との結びつきの薄さ④授業時数の確保を解決するために、ミニ道徳を実践する。ミニ道徳とは、10～20分程度で行える、道徳授業と教育活動とを結ぶための時間である。道徳授業と学校生活とを連携させることを目的としている。ミニ道徳において「生と死の教育」行うことで、道徳授業と学校生活との結びつきを強化するとともに、普段から子どもたちの死生観を日常的に高めていくということに着目して実践を行う。

児童の実態を考慮し、第1回ミニ道徳では、絵本『地獄』を用いた。読み聞かせをした後、児童に感想を書かせた。いのちを粗末にするな、というコンセプトで書かれたこの絵本によって、「いのちを大切にしなければいけないと思いました。」「お父さんやお母さんが悲しまないように、いのちを大切にしたい。」という感想が得られた。



第2回ミニ道徳では、絵本『いのちのおはなし』を用いた。現役医師である日野原先生が実際に行った授業をもとに書かれたこの絵本は、道徳授業「ふしぎな音」と重なる描写が非常に多く、心臓の音を聞くという場面においては、前に行った道徳授業と重ねていのちの大切さについて考える場面が見られた。

最後のミニ道徳においては、「カメさんへ」と題して、学級で飼っていたカメに向けて手紙を書く活動を行った。死んでしまったカメと向き合うことで、児童の思いを整理し、「死」に対する感情を表出させた。その中には、「カメさんの分まで生きる。」「わたしもいのちを大切にしよう。」という記述が見られ、児童が自らのいのちと関わりを持たせて考えることができていることを示している。

## (6) 生活指導の実践

筆者が実習に行った学級では、魚とカメを飼育していた。夏に魚が死んでしまった際には、子どもたちは無反応で、魚は何日も死んだまま放置をされていた。浮いている魚を見て、「何日もこのままだよ。」という言葉が子どもたちは発した。また、同じ年の夏、2年生の生活科の授業で、子どもたちは一人一匹ザリガニを飼育し始めた。始めて自分で飼うザリガニに、子どもたちは興味を示していた。脱皮をする姿に、いのちの神秘を感じる子どもの姿や、ザリガニの赤ちゃんを見て驚く子どもたちもいた。しかし、初めて飼育する嬉しさからか、1つの水槽に何匹もザリガニを入れている子が多く、ザリガニはすぐに死んでしまった。死んだままザリガニを教室内に放置する子どもも多く見られた。ザリガニのお墓を作りに行こうと誘っても、「気持ち悪いから行かない。」と言って、「死」から逃げる子どもの姿が見られた。その後も教室内ではザリガニが多く死んでしまっていた。ザリガニが教室のごみ箱に入っていたこともあった。その死体を持って遊ぶ姿も見られた。

また、子どもたちがザリガニを飼い始めて間もない頃、学級で飼っていたカメが死んでしまった。水槽から脱走し、トイレの中にはまって動けなくなっていたカメを見つけた子どもは、大急ぎで筆者と担任の教師を呼んだ。教室中の子どもが大騒ぎをし、休み時間にお墓を作りにいくことを学級の生き物係が提案した。しかし、実際に休み時間になると、生き物係の子どもが真っ先に運動場へ遊びに行ってしまった。他の子どもも校庭に遊びに行き、残った数人の子どもたちだけでお墓を作った。

数回の道徳授業やミニ道徳が終わった後に、学級で飼育している小さな魚が死んだ。教室に入ると、浮いている小さな魚を見つめ、担任教師と一緒にすくい上げる子どもの姿を見ることができた。カメが死んだときと同じく、生き物係が呼びかけをし、休み時間にお墓を作りにいくことになった。休み時間になると、教師が呼びかけをしていないにもかかわらず、ほとんどの児童が中庭に集まっていた。穴を掘り、みんなで魚を埋めた。お供えとして、花を持ってくる児童も多く見られた。出来上がったお墓に、手を合わせる子どもの姿も見ることができた。

このような生活指導実践から見られるように、いのちに対する子どもたちの姿は明らかに変化したと言える。

## 3 成果と課題

### (1) 効果の検証

以上の実践を終え、道徳授業と学校の教育活動における道徳教育について、「生と死の教育」を実施した考察・効果の検証をする。

まず、課題で挙げた授業形態については、道徳授業「ふしぎな音」の授業展開の中で、教材の中でやっていた心臓の音を聞くという活動を実際にやってみることによって、子どもたちは授業の内容を自己とより近づけて考えることができたように感じる。一人一人に心臓の音を聞かせると、聞こえた瞬間に子どもの目がぱっと見開いた。「先生、聞こえたよ」、「ぼくも生きてるんだね」、「本当に心臓って動いてるんだ。初めて聞いた」という子どもの言葉からは、子どもたちが自分のいのちと授業内容をつなげて考えているということが読み取れる。

次に、教材選定・教材開発について検証する。通常では、道徳資料は学年や学校のカリキュラムを定め、それを実施することや昨年度以前の年間指導計画から資料をもって来る場合も多いが、今回はその資料を用いて授業を行った。今回の資料選択のポイントは、子どもが実感できるような活動を伴う授業展開が可能であるかということである。

また、資料については自作資料を扱うことの重要性を訴えたい。自作資料は、教員にとって作成することはあまり良しとはされない。なぜなら、資料作成には時間も手間もかかる上に、子どもに願う価値がなかなか絞れないという弱点があるからである。自作資料を作成する際には、教員1人だけで単独で行うのではなく、他の教員と連携する中で、作成した資料を推敲しながら改善していく必要がある。そのための時間をとることは、教員にとっては難しいことであると感じている。しかし、自作資料を実際に作成する中で実感した自作資料の可能性について述べたい。今日的社会事象を授業で扱いたいと考えた場合、多くの教員は新聞記事やニュース記事を題材にするであろう。しかし、今回のように対象児童が低学年である場合には、そのままでは児童が理解をできない可能性がある。よって、記事をそのまま使用するのではなく、自作資料にすることで、即時的に今日的社会事象を用いて授業を展開することが可能になる。自分が狙う子どもの姿に対し、確実に価値を合わせて授業ができることで、より子どもたちの実感を伴う授業を行うことができる。資料を作成することで時間はかかるが、子どもたちの実態を考慮した上で資料を自ら作成していくことも、実感を伴う道徳授業をする上では非常に重要であることが分かる。授業を終えてみて、子どもたちからは「こんな授業したことない。」という声も聞けた。「こんな静かに終わる道徳の授業は初めて。」という子どもの言葉からも分かるように、真剣にいのちに向き合い、「死」と「生」について考えたと言える。

ミニ道徳の実施については、朝の会や授業の始め10分程度の時間を使い行った。小学校2年生の実態を考慮し、絵本を中心にミニ道徳の実践を行ったが、非常に簡素な形式の実践であったため、子どもたちは自己の考えを素直に述べていた。短い時間を重ねることにより、集中力の途切れない実践ができたと感じる。また、内容についても、いのちの大切さを伝えるために、「死」を題材とした絵本を扱ったり、今までの道徳の授業とつながったりするような絵本を読んだ。今まで学習した内容が絵本の中で触れられていると、子どもたちは「あ、この前心臓の音聞いたよね。」というように、以前の授業内容と重ねることで自己の中で整理と定着ができていた。

ミニ道徳実践においては、短時間に集中して様々な種類の実践を行うことができるということが1番の利点であると考えられる。道徳の授業だけではなく、1年の中で何回か実施することで子どもたちの死生観を深めることが可能であると言える。

最後に、「生と死の教育」を行ったことで検証されることを述べる。道徳授業実践のうち、「わすれられないあの日」では、子どもたちは震災の中で友達を失った主人公の気持ちを考えることによって、一生を大切に生きることの大切さを学んだ。「生」だけではなく「死」について考えることは、いのちについてより真剣に考えることである。授業を終えてからの子どもたちの様子を見てみると、上記で触れたように、生活指導実践の中でも変化が見られた。

## (2) 第2回いのちのアンケートの実施と分析

まずは、項目①について、1回目と2回目のアンケートの結果を1～3組(図7)4組(図8)とで比較する。

項目①については、「あなたにとって、大切なものは何ですか」という質問を児童にした。

図7からも分かるように、1～3組のアンケート結果では、全体的にやや減少傾向にあると言え、また、「健康」については大幅な減少が見られる。増加している項目は「自分」「先生」「その他」であるが、大きな変化は見られない。「いのち」については96.6%から89.2%と、やや減少していることに着目した。

一方で、道徳授業やミニ道徳、生活指導実践の対象であった4組の変容は、図8の通りである。全体的に、2回目のアンケートについては大切なものについて、1～3組と同様に下降傾向にあることが分かる。その



中で唯一、いのちを大切に答えた児童の割合だけが上昇していることが分かる。1回目は96.8%と値が高いが、これが全児童である100%になっている。

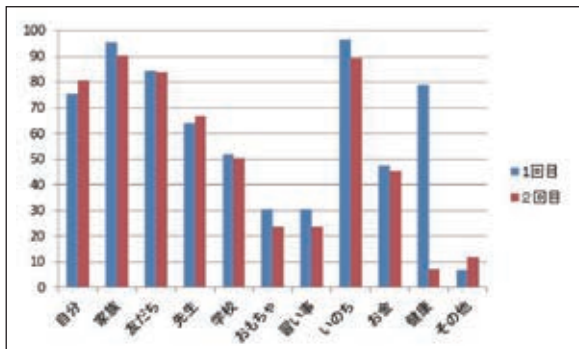


図7 第2回アンケート項目① 1～3組

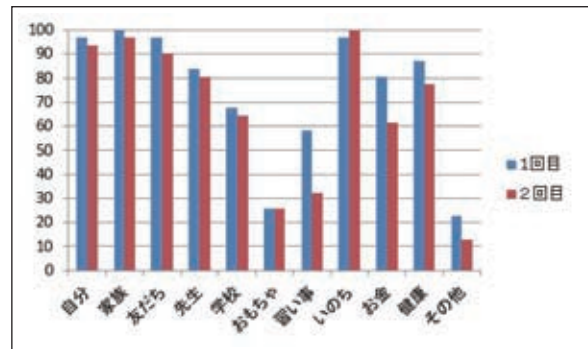


図8 第2回アンケート項目① 4組

次に、項目②である、学校で飼っている生き物を大切にしていますかという質問に対しては、以下のような結果が得られた。1～3組(図9)と、4組(図10)について比較する。図9から分かるように、1～3組において結果はほぼ変動なしとなっている。68%前後の多くの児童が、生き物をとても大切にしていると回答した。一方で、4組においては、図10から読み取れるように、「とても大切にしている」と回答した児童が減少し、「まあ大切にしている」と回答した児童が増加していることが分かる。

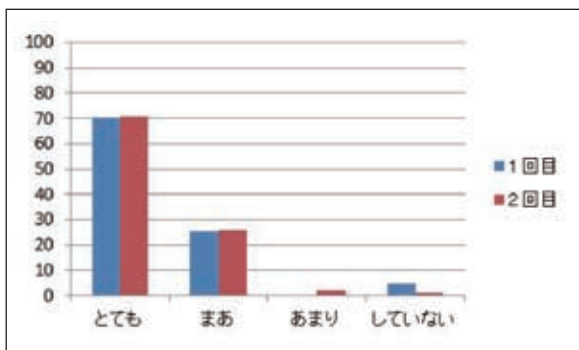


図9 第2回アンケート項目② 1～3組

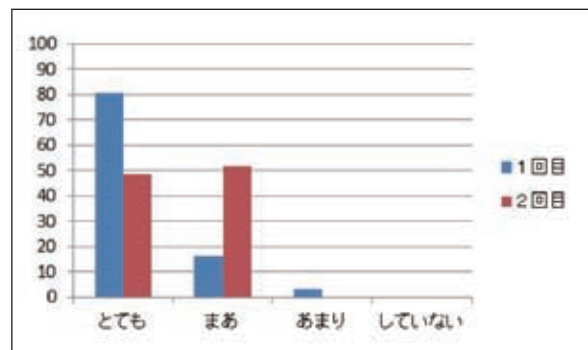


図10 第2回アンケート項目② 4組

これは、「生と死の教育」を実践したことによって、児童が、学校で飼育している生き物を大切にしているのかということ省察した結果であるのではないかと考察する。6月の段階では、4組においては80.6%の児童が「とても大切にしている」と回答している。前述したように、6月の段階においては、教室内でザリガニが死んだまま放置されていたり、魚が浮いたままになっていた。そのような状況にもかかわらず、児童は学校で飼育している生き物を「とても大切にしている」と回答していたのである。第1回アンケートの4組における結果では、児童の実態と大きくずれがあることが分かる。ここから考察すると、第2回のアンケートにおいて、4組の項目②が大きく減少したことは、児童が自らの死生観を反省した結果であると言える。

### (3) 児童の考察に基づく考察

アンケート結果からは数値的に判断できない、「生と死の教育」の効果も、子どもたちの感想から分析する。「生と死の教育」の実践を行った結果、子どもたちの感想から以下の効果があったと言える。まずは、いのちについて知ること・考えることを通して、子どもたちがいのちについて非常に興味をもったという点についてである。いのちの勉強をした結果、いのちについて探究したいという子どもが増えたと言える。「生と

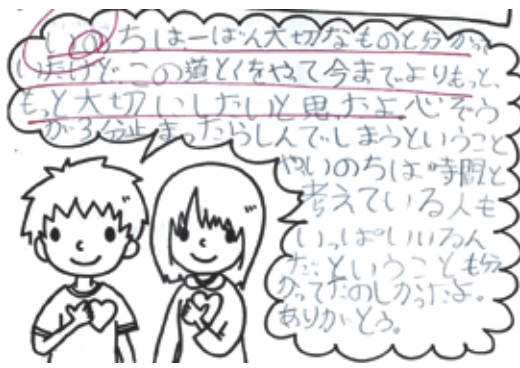


図 11 子どもの感想

死の教育」によって普段の学校生活においていのちについて考える機会を設けたことと、子どもにとって身近な教材を使うことで、いのちについて勉強することが楽しいと感じるようになった。また、いのちは大切だと知っていたけれど、実践を通してもっと大切にしなければいけないと感じたという感想が数人から得られた。今まで子どもたちが生きてきた中で、様々な機会でのいのちは大切だということを教えられてきた。そこで子どもたちが学んだいのちについて、定着させたり発展させたりする効果が「生と死の教育」にはあることが分かる。

#### (4) 「生と死の教育」の今後の課題

以上の考察から、「生と死の教育」は今後の学校教育において推進されることが有効であると言える。しかし、「生と死の教育」を実践するためにはさまざまな課題があることも確かである。

第一に、「生と死の教育」を実施するにあたり、「死」を学校で扱うことの偏見をなくしていくことである。そのためには、実践例をもとに確実に子どもたちの死生観を育成する実践を行う必要性があり、「死」の危険から子どもたちを守る体制を学校がサポートした上で、「生」と「死」を両面から扱ういのちの教育を押し進めていくことの利点を示していくことが重要である。国内外で実施された実践例等をもとに、「生と死の教育」に対する偏見を取り払うことが第1の課題と言える。

第二に、「生と死の教育」に関わる道徳授業については、資料や授業展開を精選していくことが求められる。現在ある資料をそのまま使用するだけでなく、子どもたちにとって実感のもてる道徳授業をすることが非常に重要である。教師一人一人の意思によって道徳授業を構成する必要があると共に、自作資料を作成するための研修や多様な指導法についての研修会、大学との連携を考慮した専門的な研修等、教員研修を設けることが望ましい。時代の変化に伴う道徳授業を実施するために、学校はその流れについて常に敏感に反応していかなければならない。固定化した道徳授業から脱却し、常に柔軟性のある多様な形式での道徳授業を行うべきである。

第3に、学校間や家庭、地域との連携を深めることである。本稿では、小学校段階における学校での道徳教育を中心として「生と死の教育」の重要性を述べたが、できるだけ学校間でも連携を図って「生と死の教育」を行うことが重要である。緊急性を帯びる中学校・高校段階以前での「生と死の教育」を行うという視野をもち、小学校・中学校・高校を含めた「生と死の教育」のプログラムを開発する必要があると考える。また、校種間だけの連携ではなく、「生と死の教育」を家庭や地域とも実施をすることが望ましい。学校での教育方針を発信し、三位一体となる教育の実施を行うことで、その教育効果を高めていくことが求められるだろう。

最後に、学校内において組織的に「生と死の教育」を実施することである。学校内において、教師個人が「生と死の教育」を実施するだけでなく、それを組織的に実施することで、その教育効果を高めることができる。例えば、学年の中で連携して「生と死の教育」を実施することで、教育内容の改善を適宜行うことができる。また、全校を対象とした大規模な実践を活用することも効果がある。学校内において、「生と死の教育」の精度を高め、よりよいものにしていくためには、個人だけではなく組織的な取り組みも必要になる。筆者が行った授業形態に賛同した教師が、連携協力校の2つの学級において「生と死の教育」の一環として体験的な活動を取り入れた実践を行った。子どもたちの死生観を育成するにあたり、校内ではこのように「生と死の教育」に対して広がりが見えた。このように、教師が子どもたちのために良いと思うものを積極的に取り入れることで、「生と死の教育」の実践の範囲を拡大し組織的に実施することが求められる。

(註)

- (1) 上蘭恒太郎「子どもの死の意識といのちの教育」、日本教育学会第55回大会報告『教育学研究』第64巻第1号、1996年、19頁。
- (2) 橋本治「文部科学省提案の『自殺予防教育』についての一考察」、『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』第61巻第1号、2012年、189頁。
- (3) 金光靖樹「生命尊重の道徳授業における長期的プログラムの必要性について」、『大阪教育大学紀要 第IV部門』第56巻第1号、2007年、40頁。
- (4) 川口由「教師の継続的実践に関する研究—『死』を扱ういのち教育に着目して」、日本学校教育学会第27回大会発表要旨集、2012年、36頁。
- (5) 中井文子「いのちの教育に関する教員研修の在り方についての一考察—アメリカの高等教育におけるデス・エデュケーションを中心に—」、日本道徳教育学会紀要『道徳と教育』329号、2011年、116頁。中井文子「子どもに死について教えること—アメリカのデス・エデュケーションの草創期における事例から—」、日本道徳教育学会紀要『道徳と教育』324号、2006年、148頁。中井文子「デス・エデュケーションにおける「子どもたちと死」の講座—南イリノイ大学のチャールズ・コアの事例を中心に—」、日本道徳教育学会紀要『道徳と教育』328号、2010年、148頁。
- (6) 文部科学省『生徒指導提要』、教育図書、2010年。



